

セクシュアリティのゆらぎと発達障害の ADHD との関連

松井 めぐみ（岡山大学教育推進機構）

Exploring the Connection Between Sexual/Gender Fluidity and ADHD

Megumi MATSUI

(Institute for Promotion of Education and Campus Life, Okayama University)

要旨

セクシュアリティのゆらぎと発達障害の ADHD との関連を明らかにするため、WEB による縦断調査を行った。18 歳以上の成人を対象とし、第 1 回目の調査は 11,018 人、1 年後の第 2 回目の調査では 5,474 人から回答を得た。性自認、性的指向、性表現の様々なセクシュアリティについて、2 回の調査での該当・非該当で 4 群に分け、ADHD 得点について 1 要因の被験者間分散分析を行った。「デミロマンティック」「デミセクシュアル」以外で群の主効果が有意であり、「異性愛」「ゲイ」を除くセクシュアリティで、2 回とも「非該当」群よりも「該当→非該当」群の ADHD 得点が有意に高かった。これによりセクシュアリティのゆらぎと ADHD との関連が示唆された。

Abstract

To explore the relationship between sexual/gender fluidity and ADHD, a longitudinal web-based survey was conducted with adults aged 18 and over. The first survey collected responses from 11,018 participants, and the second, one year later, from 5,474. Participants were divided into four groups based on changes in identification with various aspects of sexuality. A one-way ANOVA showed that, except for “demiromantic” and “demisexual,” most sexualities (excluding “heterosexual” and “gay”) were associated with significantly higher ADHD scores in those who shifted from identifying to not identifying. These findings suggest a potential association between sexual/gender fluidity and ADHD.

キーワード：セクシュアリティのゆらぎ，発達障害，ADHD，縦断調査

1. 問題と目的

セクシュアルマイノリティと発達障害の ADHD との関連について、近年その関連性の高さが指摘されている。TGD（トランスジェンダーおよび／またはジェンダーダイバース）と ADHD との関係についてのレビュー論文によると、12 件の研究によるデータは、TGD 当事者において ADHD の有病率が有意に高いことを一貫して示している。ただしその増加の程度や背景にある要因は明らかになっていない（Goetz & Adams, 2022）。ADHD を有する人の

ニューロダイバーシティとサイコセクシュアル機能との関連のレビュー論文（Young & Cocallis, 2023）では、ADHDを有する女性があいまいな性自認（ambivalent gender identity）を報告する傾向が有意に高い結果（Bijlenga et al., 2017）や、ADHDと診断された人の方が定型発達の人よりも、過去に同性愛的な経験があると報告する割合が有意に高く、特に女性ではその差がより顕著であったという結果（Hertz et al., 2022）が示されている。また Young et al. (2023) の研究では、ADHD群は男女ともに同性愛あるいは両性愛的な性的指向を示す割合が有意に高いという結果も出されている。よってADHDは性自認だけではなく、性的指向とも関連がある事が示唆されているが、一方でADHDを有する人と定型発達の人では、自己申告の性的指向に有意差はなかったという結果（Hertz et al., 2022）も出されており、研究の対象者や人数で結果が安定していない。ADHDとセクシュアリティの関連性に関する知見はまだ不十分であり、特に関連の要因や因果関係はまだほとんど解明されていない。

発達障害とセクシュアリティとの関連を考える上で近年注目されるのが、セクシュアリティの流動性・ゆらぎ（Sexual Fluidity, Gender Fluidity）である。Sexual Fluidityとは、性的指向の自己認識、どのような性別の人に惹かれるか、性的行動などの一つ以上が時間の経過とともに変化すること（Katz-Wise, 2014）で、Gender Fluidityとは、個人の性自認または性表現、あるいはその両方が時間や状況に応じて変化すること（Katz-Wise, 2020）である。日本ではどちらの概念もまだ浸透はしておらず、「セクシュアリティのゆらぎ、流動性」という言葉での表現を目にしやすい。日高ら（2015）の著書において、「セクシュアリティを10代の頃にはっきり自覚する人もいますが、迷ったり揺れたりする人もたくさんいます」と述べられており、セクシュアリティの自己認識は必ずしも固定ではなく、ゆらぎがある人も多い。セクシュアリティのゆらぎとADHDとの関連について、Dashnaw（2025）は、ADHDは衝動性、実行機能の障害、感情の調整の困難を特徴とする神経発達障害であり、性の多様性—gender nonconformity, nonbinary identities, および gender fluidity—との間に注目すべき相関関係が見られると述べている。また当事者達の声として、アメリカの大手掲示板「Reddit」のGender FluidityやSexual Fluidityのスレッドでは、“I feel like my ADHD takes what other trans people go through and amplifies it by 1000 (hyper-focusing on figuring out my gender, imposter syndrome, etc.)”（Reddit, 2020）という書き込みや、“I am an ADHDer who was assigned female at birth, but I've been switching genders since I was four years old (genderfluid ftw).”（Reddit, 2022）という書き込み、“idk where I am on the sexuality or gender spectrum. A lot of the confusion was my ADHD blurring everything and now that I'm medicated I don't know what I am.”（Reddit, 2025）などがあり、Gender FluidityやSexual FluidityとADHDとの関連が当事者による意見として示唆されている。日本では、館農（2023）が「自我同一性は周囲との相互作用を通じて形成されていくため、社会性の障害を有する自閉スペクトラム症（ASD）では、その確立過程でさまざまな揺らぎを呈することがある。」とASDとセクシュアリティのゆらぎについて述

べている他、砂川（2023）は ASD のある女性の *gender diversity* について、「はっきりと自身の性に違和感があるというよりもむしろ、性を含めた自己概念が曖昧な状態である人も少なくないと考えられる。」と述べている。しかしながら、ADHD とセクシュアリティのゆらぎに関する研究は未だ行われておらず、館農（2023）や砂川（2023）の論文は臨床的な見地から述べられているものである。著者も実際の臨床で ADHD を有するクライアントのセクシュアリティのゆらぎを何例も経験しているが、学術的な調査は未実施であった。日本でこれまで定量的、縦断的に「セクシュアリティのゆらぎ」を追跡した研究は行われておらず、ADHD との関連についても未知数である。

そこで本研究では、セクシュアリティのゆらぎと発達障害の ADHD との関連性を探るため、同一の回答者を対象とした大規模質問紙調査の縦断調査を実施する。縦断調査によって、実際にその人のセクシュアリティの自己認識の変化を客観的に見出すことが出来る。また性自認、性的指向、性表現も含めた様々なセクシュアルリティのゆらぎを調査する事で、セクシュアリティによって違いがあるのかも探る。本研究はセクシュアルマイノリティと ADHD 特性との関連についての松井（2025）の調査対象者に、1年後に縦断調査を行って得られた結果を分析したものである。自己記入式の調査であるため、臨床研究とは異なり、あくまでも実態把握のレベルではあるが、関連性の傾向を掴むことはできると思われる。本研究により、日本におけるセクシュアリティのゆらぎと ADHD との関連の一端を明らかにする事を目的とする。

2. 方法

2.1 調査方法

1年の間隔を空けて WEB 調査の縦断調査を実施した。調査会社に依頼し、第1回目の調査（以下 T1）は、2023年11月に18歳以上の成人を対象に実施した。回答者は11,018人（平均年齢39.47歳、 $SD=17.31$ ）で、戸籍上の性別は男性5,349人、女性5,525人、答えたくない144人であった。第2回目の調査（以下 T2）は、2024年11月に、T1調査の回答者を対象に実施した。T2調査の回答者は5,474人（平均年齢49.69歳、 $SD=14.80$ ）で、戸籍上の性別は男性2,804人、女性2,657人、答えたくない13人であった。T1とT2における各セクシュアリティ別の人数と割合を、Table 1（性自認）、Table 2（性的指向）、Table 3（性表現）に示した。

2.2 調査内容

T1調査は以下の①～④で構成されており、本研究ではその内の②と④を分析対象とした。T2調査はT1調査の①と②について再度尋ねた。①～④の具体的な内容は以下の通りであった。

Table 1 性自認別の人数

性自認	T1調査 T2調査	
	トランスジェンダー	144
・トランスウーマン	99	15
・トランスマン	45	9
Xジェンダー	117	20
・Xジェンダー中性	31	6
・Xジェンダー両性	30	10
・Xジェンダー不定性	18	1
・Xジェンダー無性	38	3
ノンバイナリー	102	31
クエスチョニング	190	42
女性	5,315	2,600
男性	5,115	2,732
その他	16	3
答えたくない	204	49

Table 2 性的指向別の人数

性的指向	T1調査 T2調査	
	ゲイ	109
レズビアン	78	21
バイセクシュアル	300	68
パンセクシュアル	208	40
アロマンティック	263	106
アセクシュアル	253	98
デミロマンティック	193	78
デミセクシュアル	150	58
リスロマンティック	99	32
異性愛	9,209	4,897
その他	60	10
答えたくない	743	213

Table 3 性表現別の人数

性表現	T1調査 T2調査	
	クロスドレッサー/ トランスヴェスタイト	209
DSDs	262	93
上記のどれにも 当てはまらない	9,864	5,121
その他	16	6
答えたくない	694	218

①回答者の属性：年齢，職業（所属），戸籍上の性。

②セクシュアリティ

【性自認】（当てはまるものを全て選択）「トランスジェンダー（自認する性と出生時に割り当てられた戸籍上の性が異なる）」「Xジェンダー（性自認が男性にも女性にもあてはまらない）」「ノンバイナリー（性自認と性表現が男性・女性の枠組みにあてはまらない）」「クエスチョニング（性のあり方を決めたくない，決めない，悩んでいる）」「女性」「男性」「その他」「答えたくない」。この内，「トランスジェンダー」を選択した場合，さらに「トランスウーマン（戸籍上の性が男性で，性自認が女性）」か「トランスマン（戸籍上の性が女性で，性自認が男性）」のどちらかを選択。「Xジェンダー」を選択した場合，さらに「中性（男性と女性の間）」「両性（男性でもあり女性でもある）」「不定性（性自認が流動的）」「無性（男性・女性のどちらでもない）」のどれか一つを選択。

【性的指向】（当てはまるものを全て選択）「異性愛者（好きになる相手は異性）」「ゲイ（性自認が男性で，好きになる相手が男性）」「レズビアン（性自認が女性で，好きになる相手が女性）」「バイセクシュアル（好きになる相手が女性も男性も両方）」「パンセクシュアル（好きになる相手が全ての性，もしくは好きになる際に相手の性別にとらわれない）」「アロマンティック（他者に対して恋愛感情を抱かない）」「アセクシュアル（他者に対して性的欲求を抱かない）」「デミロマンティック（強い絆で結ばれている人にものみ恋愛感情を抱く）」「デミセクシュアル（強い絆で結ばれている人にものみ性的欲求を抱く）」「リスロマンティック（他者に恋愛感情を抱くものの，他者から恋愛感情を抱かれることを好まない）」「その他」「答えたくない」。

【性表現や身体的性】（当てはまるものを全て選択）「DSDs（性分化疾患・インターセック

ス)「クロスドレッサー・トランスヴェスタイト(性自認と身体的性は一致しているが、女装／男装などの異性装をする)」「その他」「上記のどれにも当てはまらない」「答えたくない」。ただし、DSDs については、「現実には、DSDs を持つ人々の大多数は自身を LGBTQ 等性的マイノリティの一員だとは思っていないことも指摘されている」(ヨ・ヘイル, 2020) 事から、本研究では【性表現】の「クロスドレッサー・トランスヴェスタイト」のみを分析の対象とした。

③成人用 AQ (Autism-Spectrum Quotient) 自閉スペクトラム指数日本語版 (若林他, 2004)
自閉スペクトラム症のスクリーニング検査で、50 項目に対して「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」「どちらかといえばあてはまらない」「あてはまらない」の 4 件法で回答。

④成人期 ADHD 検査 Adult ADHD Self-Rating Scale (A-ADHD) (福西, 2016)
発達障害の ADHD のスクリーニング検査で、35 項目に対して「あまりない」「ときどき」「しばしば」「いつも」の 4 件法で回答。ADHD の主要な構成要素「不注意」「多動性」「衝動性」に関する 20 項目と、ADHD にみられやすい二次障害に関する 9 項目、自閉症スペクトラム障害や学習障害などの ADHD に併発しやすい神経発達障害に関する 6 項目から成る。本研究では「不注意」「多動性」「衝動性」に関する 20 項目の合計得点を ADHD 得点とし、分析に使用した。

2.3 倫理的配慮

本研究は岡山大学「津島地区倫理審査委員会」の承認 (23-006) を得て実施された。調査は無記名式で実施され、研究者は回答者の個人名を取得しない方法がとられた。回答者は調査前に提示された調査に関する説明文章を読んだ上で、調査に同意する人が「同意します」にチェックを入れると、回答ページに進む形式で行われた。調査の回答データは自由記述以外は数値のみで、データは暗号化されて保管されている。本研究は開示すべき利益相反関係にある企業等はない。

3. 結果

3.1 セクシュアリティのゆらぎと ADHD 得点との関連

セクシュアリティのゆらぎを見るため、各セクシュアリティについて、T1 と T2 のどちらの時も「あてはまる」と答えた群 (該当群)、どちらの時も「あてはまる」と答えなかった群 (非該当群)、T1 では「あてはまる」と回答し T2 では「あてはまる」と回答しなかった群 (該当→非該当群)、T1 では「あてはまる」と回答せず T2 では「あてはまる」と回答した群 (非該当→該当群) の 4 群に分けた。4 群の内、「該当→非該当群」と「非該当→該当群」は縦断調査でセクシュアリティの自己認識に変化 (ゆらぎ) があつたと群と見なした。その 4 群で ADHD 得点に差があるかどうか、1 要因の被験者間分散分析を行ったが、群に

よって人数が大きく異なるため、人数差に頑強である Welch の ANOVA を行い、事後検定として Games-Howell 法を使用した。分析の際、性自認、性的指向、性表現のそれぞれで「答えたくない」に回答した人の中には、各セクシュアリティに該当する人が含まれる可能性があるため、分析からは除外した。

分散分析の結果 (Table 4), 「デミロマンティック」「デミセクシュアル」以外で群の主効果が有意であった。「トランスジェンダー ($F(3,21.40) = 8.62, p < .001$)」では群の主効果が有意であったため、事後検定を行ったところ、5%水準で有意差があったのは「該当→非該当群」>「非該当群」であった。同様の分析をセクシュアリティ別に行ったところ、性自認の「X ジェンダー ($F(3,12.76) = 16.00, p < .001$)」では「該当→非該当群」「非該当→該当群」>「非該当群」, 「ノンバイナリー ($F(3,23.74) = 9.48, p < .001$)」では「該当→非該当群」「非該当→該当群」>「非該当群」, 「クエスチョニング ($F(3,34.89) = 11.28, p < .001$)」では「該当→非該当群」「該当群」>「非該当群」, 「女性 ($F(3,82.60) = 11.19, p < .001$)」では「該当→非該当群」「非該当→該当群」>「非該当群」>「該当群」, 「男性 ($F(3,94.55) = 5.49, p = .002$)」では「該当→非該当群」「非該当→該当群」>「非該当群」「該当群」であった。性的指向の「ゲイ ($F(3,19.25) = 6.45, p = .003$)」では「該当→非該当群」>「非該当群」「該当群」, 「レズビアン ($F(3,14.87) = 9.28, p = .001$)」では「該当→非該当群」「該当群」>「非該当群」, 「バイセクシュアル ($F(3,46.69) = 11.19, p < .001$)」では「該当→非該当群」「非該当→該当群」「該当群」>「非該当群」, 「パンセクシュアル ($F(3,32.83) = 6.59, p = .001$)」では「該当→非該当群」>「非該当群」, 「アロマンティック ($F(3,84.32) = 13.73, p < .001$)」では「該当→非該当群」「非該当→該当群」「該当群」>「非該当群」, 「アセクシュアル ($F(3,68.19) = 5.61, p = .002$)」では「該当群」>「非該当群」, 「リスロマンティック ($F(3,21.43) = 7.52, p = .001$)」では「該当→非該当群」「非該当→該当群」>「非該当群」, 「異性愛 ($F(3,321.48) = 25.76, p < .001$)」では「該当→非該当群」「非該当→該当群」「非該当群」>「該当群」であった。性表現の「クロスドレッサー ($F(3,32.35) = 13.04, p < .001$)」では「該当→非該当群」「非該当→該当群」「該当群」>「非該当群」であった。

なお「トランスジェンダー」の「トランスウーマン」と「トランスマン」の2群×セクシュアリティのゆらぎ4群, 「X ジェンダー」の「中性」「両性」「不定性」「無性」の4群×セクシュアリティのゆらぎ4群での ADHD 得点の分散分析は、群によって人数が少なく、0人の群もあったため、分析を行わなかった。

4. 考察

本論文では、性自認、性的指向、性表現における様々なセクシュアリティについて、縦断調査によってセクシュアリティの自己認識にゆらぎがある人（「該当→非該当群」「非該当→該当群」）とゆらぎがない人（「該当群」「非該当群」）に分類し、それらの群間で ADHD 得

Table 4 セクシュアリティ別の各群ごとのADHD得点、分散分析結果

	該当群 <i>n</i>	非該当群 <i>n</i>	該当→ 非該当群 <i>n</i>	非該当→ 該当群 <i>n</i>	<i>F</i> 値	多重比較
性自認						
トランスジェンダー	38.08(12.49) 12	28.86(10.00) 5381	41.40(13.73) 20	35.17(10.40) 12	8.62 ***	該当→非該当群>非該当群
Xジェンダー	35.80(11.19) 5	28.85(9.97) 5390	45.00(11.90) 15	45.40(13.18) 15	16.00 ***	該当→非該当群, 非該当→該当群>非該当群
ノンバイナリー	36.09(10.03) 11	28.85(9.97) 5376	43.44(18.07) 18	37.20(10.47) 20	9.48 ***	該当→非該当群, 非該当→該当群>非該当群
クエスチョニング	38.88(13.28) 25	28.83(9.98) 5357	38.77(12.47) 26	34.12(10.19) 17	11.28 ***	該当→非該当群, 該当群>非該当群
女性	28.43(9.51) 2551	29.19(10.28) 2799	34.81(10.26) 26	38.76(16.68) 49	11.19 ***	該当→非該当群, 非該当→該当群>非該当群>該当群
男性	28.83(9.94) 2687	28.86(9.94) 2659	35.94(14.59) 34	35.58(15.27) 45	5.49 **	該当→非該当群, 非該当→該当群>非該当群, 該当群
性的指向						
ゲイ	29.21(9.38) 29	28.82(9.96) 5212	46.11(11.88) 9	33.45(12.01) 11	6.45 **	該当→非該当群>非該当群, 該当群
レズビアン	39.92(13.04) 13	28.80(9.95) 5230	41.30(10.02) 10	38.88(12.19) 8	9.28 **	該当→非該当群, 該当群>非該当群
バイセクシュアル	36.55(14.56) 49	28.70(9.82) 5160	35.94(14.32) 33	40.42(14.64) 19	11.19 ***	該当→非該当群, 非該当→該当群, 該当群>非該当群
パンセクシュアル	32.73(12.53) 15	28.78(9.93) 5195	37.62(12.64) 26	34.88(11.95) 25	6.59 **	該当→非該当群>非該当群
アロマンティック	34.50(9.87) 54	28.69(9.90) 5108	34.57(11.95) 47	34.73(12.19) 52	13.73 ***	該当→非該当群, 非該当→該当群, 該当群>非該当群
アセクシュアル	32.90(10.12) 58	28.77(9.96) 5130	34.64(13.42) 33	30.48(8.63) 40	5.61 **	該当群>非該当群
デミロマンティック	42.13(24.15) 8	28.84(9.97) 5122	29.82(9.72) 61	28.39(8.30) 70	1.04 n.s.	
デミセクシュアル	38.29(16.42) 7	28.85(9.98) 5152	29.55(10.41) 51	28.69(9.42) 51	0.81 n.s.	
リスロマンティック	34.88(13.36) 8	28.76(9.89) 5207	41.32(16.02) 22	37.17(13.80) 24	7.52 **	該当→非該当群, 非該当→該当群>非該当群
異性愛	28.37(9.55) 4661	34.27(12.14) 234	31.02(11.32) 130	32.14(12.75) 236	25.76 ***	該当→非該当群, 非該当→該当群, 非該当群>該当群
性表現						
クロスドレッサー・トランスヴェスタイト	43.54(14.13) 13	28.69(9.78) 5185	39.84(14.32) 31	36.19(13.93) 27	13.04 ***	該当→非該当群, 非該当→該当群, 該当群>非該当群

****p*<.01, ***p*<.001

点の差異を検討した。その結果、「デミロマンティック」「デミセクシュアル」以外のセクシュアリティで有意な差が見られ、「アセクシュアル」以外は全て「該当→非該当群」の ADHD 得点が有意に高かった。この結果はセクシュアリティの自己認識のゆらぎと ADHD 特性には関連性がある事を示唆するものである。また「異性愛」を除く全てのセクシュアリティで、「非該当群」は有意に ADHD 得点が低い結果であった。それは言い換えればセクシュアルマイノリティと ADHD 特性との関連性を示唆するものでもあり、松井（2025）の結果と同様である。

さらに詳細に結果を見ていくと、セクシュアリティのゆらぎがあった人達の中で、「該当→非該当群」はほとんどどのセクシュアリティで ADHD 得点が高かった一方、「非該当→該当群」はセクシュアルマイノリティの「X ジェンダー」「ノンバイナリー」「バイセクシュアル」「アロマンティック」「リスロマンティック」「クロスドレッサー」と、セクシュアルマジョリティが多いと考えられる「女性」「男性」「異性愛」で、ADHD 得点が「非該当群」もしくは「該当群」より高かった。「該当→非該当群」は、「自分はこのセクシュアリティである」と一度は認識したもののその後「そうではない」と認識した人達であり、「非該当→該当群」は特定のセクシュアリティであると認識していなかったがその後「そうである」と認識した人達である。おそらくセクシュアルマイノリティとされるセクシュアリティにおいて、「該当→非該当群」は実際には「非該当→該当→非該当」の人が多くのではないかと考えられ、ゆらぎの回数の多さは ADHD によるものなのかもしれない。しかしながら、今回の研究では T1 と T2 の 2 時点でしか調査を行っておらず、また 1 年の間隔でしか調査を行っていないため、その人の人生におけるセクシュアリティのゆらぎの一部分しか測れていない。今後さらに長期的な縦断調査を行うことにより、ゆらぎの変遷や ADHD との関連性がより詳細かつ具体的に明らかになっていくと思われる。

今回の結果で唯一セクシュアリティのゆらぎが関連していなかったのが「アセクシュアル」で、「該当群」の方が「非該当群」よりも有意に ADHD 得点が高い結果であった。なぜそのような結果になったのか具体的な理由は分からないが、「アセクシュアル」は松井（2024）の結果で、セクシュアルマイノリティの中で最も発達障害の ASD の方との関連性が高かったため、ADHD より ASD の影響が強い可能性が理由としては考えられる。「アセクシュアル」のゆらぎについて、他のセクシュアルマイノリティのゆらぎと何か異なるものがあるのかどうか今後注視していきたい。今回 4 群で有意差が見られなかった「デミロマンティック」と「デミセクシュアル」は、該当群の人数の少なさが、有意差が出なかった事に関係しているのかもしれない。あるいはどちらも「強い絆で結ばれている人」にのみ恋愛感情や性的感情を抱くというセクシュアリティであるため、自分の ADHD 特性より、強い絆で結ばれる誰かと出会うかどうかという事の方が、ゆらぎに影響を与えている可能性があるのかもしれない。

本研究では、セクシュアルマイノリティだけではなく、セクシュアルマジョリティが多い

と思われる「女性」「男性」「異性愛」についても分析を行っている。その結果、どれも「該当群」は「該当→非該当群」「非該当→該当群」より有意に ADHD 得点が低かったことから、自分はセクシュアルマジョリティ的なセクシュアリティであると、安定してゆらぎに認識している人は、ゆらぎがある人よりも、ADHD 特性との関連性が低い事が分かった。ADHD 特性が低いからゆらぎがないのか、ADHD 特性が高いからゆらぎやすいのか、その影響関係までは本研究では分からない。また ADHD の様々な特性（衝動性、多動性、不注意、新奇探索、感情調節の難しさ等）の何がセクシュアリティのゆらぎやセクシュアルマイノリティである事に関連しているのか、詳細はまだ分かっていない。今後は実際にゆらぎを経験しているセクシュアルマイノリティの人で、かつ ADHD 特性が高い人に直接話を聞くことから探っていきたい。

本研究は T1 時点で 1 万人を超える大規模調査で縦断調査を実施したが、T2 時点の回答者は半分ほどであり、4 群に分けた際にセクシュアリティのゆらぎがあった群はかなり少なかった。中には「ゲイ」の「該当→非該当群」が 9 人、「レズビアン」の「該当→非該当群」が 10 人 など、群の人数が 10 人前後の群もあったため、そのような少数の群であったセクシュアリティの結果を一般化することには慎重である必要がある。T2 の回答者は T1 に比べて 10 代～20 代前半がかなり減少しており、セクシュアリティのゆらぎが生じやすいと思われるこの世代の回答者が少なかったことは、本来は存在するかもしれないセクシュアリティのゆらぎによる結果が、今回の調査では現れていない可能性も考えられる。より正確な関連性を知るためには、より多くの、特に今回の調査で脱落した 10 代～20 代前半の人達を対象とした調査が必要である。また性自認、性的指向、性表現のそれぞれで「答えたくない」に回答した人を、本研究では分析から除外したが、その中には回答を表明したくない人だけではなく、どれに当てはまるか自分でも分からない状態だから答えたくない、答えられないという人もいたのではないと思われる。「答えたくない」と回答した人の特徴も、可能であれば探っていきたい。そして本来であれば、ADHD 得点よりも ADHD のカットオフ得点以上の人数を分析する事が望ましいと考えたが、カットオフ得点以上の人数で 4 群に分けると人数がゼロの群も頻出したため、分析を断念した。よって本研究はあくまでも ADHD 得点の高さを見ており、ADHD である可能性が高い人を対象としたものではない事は結果の解釈に注意が必要である。もともと本研究は大規模調査で関連性を掴むのが目的であるが、正確な関連性を論じるためには、ADHD と医療機関で診断された人を対象とした研究が行われる事が望ましい。また本研究は発達障害の ADHD のみを分析したが、ASD もセクシュアリティのゆらぎには関連している事が考えられ、ASD とセクシュアリティのゆらぎ、あるいは ASD と ADHD が併存している人のセクシュアリティのゆらぎについても、今後研究が急がれる。

上記のような研究上の課題はあるものの、本研究はこれまで日本で行われていなかった、セクシュアリティのゆらぎと発達障害の ADHD との関連性を示す初期的な知見が得る事が

できた。ADHD 特性がある場合は、セクシュアリティがゆらぎやすい可能性がある事を踏まえた上で、セクシュアルマイノリティの理解やサポートを行っていく事が望まれる。

付記

本研究は JSPS 科研費の挑戦的研究（萌芽）22K18556 「発達障害とセクシュアルマイノリティの合併・関連性」（研究代表者：松井めぐみ）の助成を受けたものです。

引用文献

Bijlenga, D., Vroege, J.A., Stammen, A.J.M., Breuk, M., Boonstra, A.M., van der Rhee, K., & Kooij, J.J.S. (2017). Prevalence of sexual dysfunctions and other sexual disorders in adults with attention-deficit/hyperactivity disorder compared to the general population. *ADHD Atten Deficit Hyperact Disord*, 10(1), 87–96. doi:10.1007/s12402-017-0237-637.

Dashnaw, D. (2025). Gender Expansive Behavior and ADHD: A Neurodevelopmental Perspective. https://danieldashnawcouplestherapy.com/blog/gender-expansive-behavior-and-adhd?utm_source=chatgpt.com (2025 年 8 月)

福西 勇夫 (2016). 成人期 ADHD 検査 Adult ADHD Self-Rating Scale (A-ADHD) 株式会社千葉テストセンター

Goetz, T. G., & Adams, N. (2022). The transgender and gender diverse and attention deficit hyperactivity disorder nexus: A systematic review. *Journal of Gay & Lesbian Mental Health*, 28(1), 2–19. <https://doi.org/10.1080/19359705.2022.2109119>

Hertz, P.G., Turner D, Barra, S., Biedermann, L., Retz-Junginger, P., Schöttle, D., & Retz, W. (2022). Sexuality in adults with ADHD: results of an online survey. *Front Psychiatry*, 16(13), 868278. doi:10.3389/ fpsyt.2022.86827836.

日高 庸晴 (監著) 星野 慎二・長野 香・福島 静恵 (2015). LGBTQ を知っていますか? “みんなと違う” は “ヘン” じゃない 少年写真新聞社

Katz-Wise, S.L. (2014). Sexual fluidity in young adult women and men: associations with sexual orientation and sexual identity development. *Psychology & Sexuality*, 6(2), 189–208. <https://doi.org/10.1080/19419899.2013.876445>

Katz-Wise, S.L. (2020). Gender fluidity: What it means and why support matters. *Harvard Health Publishing*. https://www.health.harvard.edu/blog/gender-fluidity-what-it-means-and-why-support-matters-2020120321544?utm_source=chatgpt.com (2025 年 8 月)

松井 めぐみ (2024). セクシュアルマイノリティと発達障害の関連性 自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder: ASD) との関連の検討 日本心理学会第 88 回大会, 1C-040-PD.

松井 めぐみ (2025). セクシュアルマイノリティと発達障害の ADHD 特性との関連 岡山

大学教育推進機構教育研究紀要, 2, 1-12.

Reddit (2020). Transgender and ADHD anyone?

https://www.reddit.com/r/asktransgender/comments/hx8rj4/transgender_and_adhd_anyone/?utm_source=chatgpt.com (2025 年 8 月)

Reddit (2022). ADHD in trans folk and cis women.

https://www.reddit.com/r/ADHDers/comments/ucaz8z/adhd_in_trans_folk_and_cis_women/?utm_source=chatgpt.com (2025 年 8 月)

Reddit (2025). My sexuality has fluctuated a lot, is this an AuDHD thing?

https://www.reddit.com/r/AuDHDWomen/comments/1jnn3jy/my_sexuality_has_fluctuated_a_lot_is_this_an/?utm_source=chatgpt.com (2025 年 8 月)

砂川 芽吹 (2023). 発達障害とジェンダー, セックス—自閉スペクトラムのある女の子・女性を中心として— 発達障害研究, 45 (2) 140-151.

館農 勝 (2023). 発達障害と性同一性の課題—LGBTQ+の状態像とその背景— 発達障害研究, 45 (2) 103-111.

若林 明雄・東條 吉邦・Baron-Cohen, S.・Wheelwright, S. (2004). 自閉症スペクトラム指数 (AQ) 日本語版の標準化—高機能臨床群と健常成人による検討— 心理学研究, 75, 78-84.

ヨ・ヘイル (2020). DSDs : 体の性の様々な発達 (性分化疾患/インターセックス) とキヤスター・セメンヤ 排除と見世物小屋の分裂 ジェンダー法研究, 7, 99-158.

Young S., & Cocallis K. (2023). A Systematic Review of the Relationship Between Neurodiversity and Psychosexual Functioning in Individuals with Autism Spectrum Disorder (ASD) or Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder (ADHD). *Neuropsychiatric Disease and Treatment*, 19, 1379-1395. <https://doi.org/10.2147/NDT.S319980>

Young, S., Klassen, L.J., Reitmeier, S.D., Matheson, J.D., & Gudjonsson, G.H. (2003). Let's Talk about Sex... and ADHD: Findings from an Anonymous Online Survey. *International Journal of Environmental Research and Public Health*, 20, 2037. <https://doi.org/10.3390/ijerph20032037>